



追手門学院大学附属図書館 宮本輝ミュージアム

2008年、学校法人追手門学院は創立120周年を迎えました。「宮本輝ミュージアム」は、学院の創立120周年事業の一環として、2005年5月、追手門学院大学附属図書館を改修し、開設しました。「宮本輝ミュージアム」では本学第一期卒業生で、作家として活躍する宮本輝氏の愛用品、直筆原稿などを常設展示しています。また、作品の世界を取り上げた企画展を開催し、広く一般の方へも公開しています。

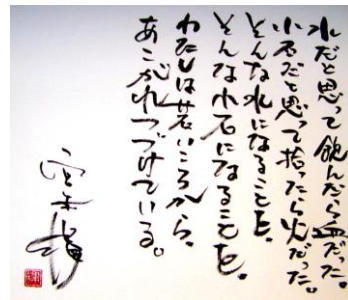
宮本輝氏の著作を通して、学生及び市民の皆様にご感動と共感の場を提供できれば幸いです。

宮本輝ミュージアム展示品リスト

【東側】

◎年譜

◎自筆の詩（ガラス板）



《年譜下ガラスケース》

- 広辞苑 ●インクと万年筆 ●直筆原稿（複製）「生きものたちの部屋（3）『インクと万年筆』
- 湯のみ ●懐中時計（芥川賞正賞） ●グラス ●小物入れのかご ●水差し ●墨、筆
- 硯 ●自筆の書「正直であるということの凄さ」（複製）

- 追手門学院大学第一期生卒業記念アルバム（在学中の写真）・第二期生卒業記念アルバム（茨木学舎全景）
- 追手門学院大学三十年史 「創立三十周年を祝して（宮本輝）」
- 読売新聞記事 昭和57年（1982）7月26日（月）夕刊 1面・3面 パネル

【北側・展示架】

①作家活動のはじまり

1977年デビュー作「泥の河」と「螢川」を相次いで『文芸展望』に発表。「泥の河」で第13回太宰治賞、「螢川」で第78回芥川龍之介賞を受賞した。この2作は1978年に発表された「道頓堀川」とともに「川三部作」として著者の代表作となった。

『螢川』『道頓堀川』『川三部作 泥の河 螢川 道頓堀川』『幻の光』『星々の悲しみ』

②初期の作品

芥川賞受賞後、肺結核を発病し、約2年間の療養を余儀なくされた。復帰後、旺盛な創作活動が開始される。

『ドナウの旅人（上・下）』 『錦繡』と冒頭部分原稿（複製）

③初めての海外取材

1982年「ドナウの旅人」執筆取材のため、ドナウ川流域を訪問。以後、毎年のようにヨーロッパ諸国等へ取材旅行。

『異国の窓から』

④映画化された代表作

1982年「泥の河」が小栗康平監督によって映画化され、モスクワ国際映画賞銀賞ほかを受賞した。以後、多くの作品が映画化、ドラマ化されている。

「優駿」競走馬の世界を描いた作品で、日本中央競馬会から第一回馬事文化賞を受賞。

1987年に吉川英治文学賞を受賞し、1988年映画化された。

『優駿（上・下）』 映画『優駿』DVDと映画パンフレット 映画『幻の光』 ビデオ

⑤海外を舞台にした作品

『愉楽の園』 タイを舞台にした作品。著者が最初に書いた小説「弾道」が作品の原型となっている。

⑥青春時代を描いた作品

『青が散る』と連載第1回冒頭部分原稿（複製） 新設大学に入学した椎名燎平はテニスコートのないテニス部に所属する。燎平の恋や友情、青春をテニスとともに描いた作品。

『春の夢』『二十歳の火影』

⑦“父と子”を描くライフワーク『流転の海』

敗戦後の昭和22年、50歳で長男を得た松坂熊吾の半生を描く大河小説。1982年著者35歳の年に執筆が開始された。当初は全五部作の予定だったが徐々に延び、現在は全九部作となる予定である。

連載第1回冒頭部分原稿（複製）と『流転の海 第一部』（福武書店）

第一部『流転の海』 第二部『地の星』 第三部『血脈の火』 第四部『天の夜曲』

第五部『花の回廊』 第六部『慈雨の音』 第七部『満月の道』 第八部『長流の畔』（新潮社）

⑧青春と読書

13歳の日、井上靖著『あすなろ物語』を読んで以後、読書に耽溺した。本や小説は、波間にただよう小舟のような、14歳から18歳までのよるべない時代の支えのような存在であっただろう。

『本をつんだ小舟』思い出の作品と読書体験を記した作品。宮本輝編纂のアンソロジー集

⑨『川三部作』

筑摩書房 1985年刊。限定200部中の第187番

⑩作家 宮本輝を知る本

『新潮四月臨時増刊 宮本輝』新潮社 1999年4月刊

⑪「優駿」

連載第1回冒頭部分原稿（複製）

⑫海外に翻訳された作品

1986年の『泥の河』中国語版発行以後、中国語、フランス語、英語、ハングル語、ロシア語などへの翻訳書が多数刊行されている。

『彗星物語（上・下）』（原書 角川書店1992年刊）とハングル語版（Koreaone Press1993年刊）
訳者は金賢姫

⑬恋愛をテーマにした作品

『私たちが好きだったこと』

⑭「ドナウの旅人」以降の新聞連載（1）

『花の降る午後』角川書店 1988年刊（1985年7月～1986年2月『新潟日報』等に連載）

『海岸列車（上・下）』毎日新聞社 1989年刊（1988年1月～1989年2月『毎日新聞』連載）

『ここに地終わり海始まる』講談社 1991年刊（1990年3月～11月『福島民友』等に連載）

⑮「ドナウの旅人」以降の新聞連載（2）

『朝の歎び（上・下）』講談社 1994年刊（1992年9月～1993年10月『日本経済新聞』連載）

『人間の幸福』幻冬舎 1995年刊（1994年5月～1995年1月、『産経新聞』連載）

『草原の椅子（上・下）』毎日新聞社 1999年刊（1997年12月～1998年12月『毎日新聞』連載）

『約束の冬（上・下）』改訂版文藝春秋 2004年刊（初版2003年刊）（2000年10月～2001年10月『産経新聞』連載）

⑯阪神淡路大震災後の作品

作家自身もこの大震災によって被災した。震災の渦中、日々増大していく被害は、連載終盤を迎えていた『人間の幸福』最終章にも影響を与えた。

『森のなかの海（上・下）』震災当日の朝から始まる物語

⑰シルクロードへの旅

1995年5月、約1700年前に膨大な經典の漢語訳をなした鳩摩羅什^{クマラジユウ}の足跡を辿る40日間にわたるシルクロードの旅に出た。『ひとたびはポプラに臥す』旅の紀行文集

『星宿海への道』『胸の香り』シルクロードの旅に題材をとった短編「道に舞う」を収録。

⑱2005年ミュージアム開設以後の発表作品

『にぎやかな天地（上・下）』中央公論新社 2005年刊（2004年5月～2005年7月『読売新聞』連載）

『骸骨ビルの庭（上・下）』講談社 2009年刊（2006年6月～2009年2月『群像』連載）

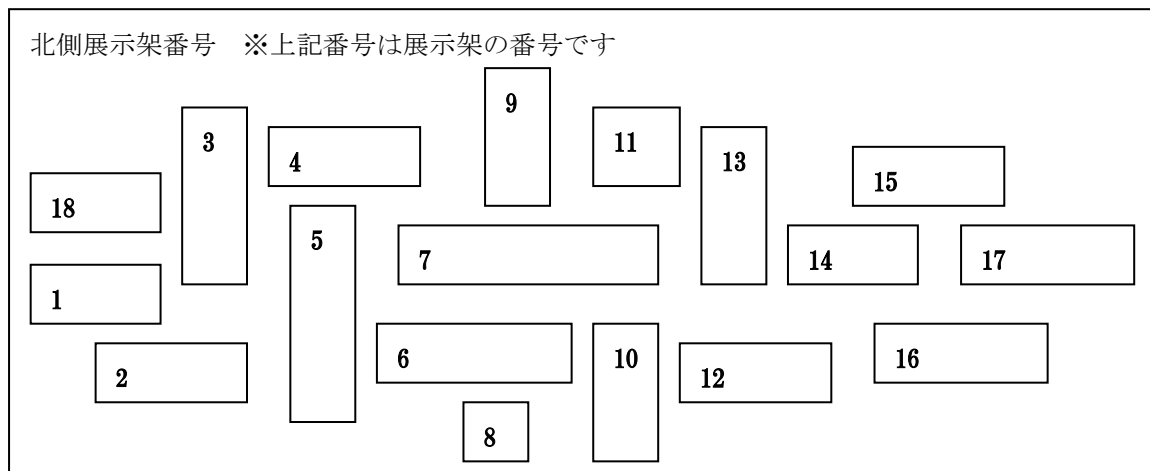
『三千枚の金貨（上・下）』光文社 2010年刊（2006年4月～2009年8月『BRIO』掲載）

『三十光年の星たち（上・下）』毎日新聞社 2011年刊（2010年1月～2010年12月『毎日新聞』連載）

『水のかたち（上・下）』集英社 2012年刊（2007年10月～2012年7月『éclat』掲載）

『田園発港行き自転車（上・下）』集英社 2015年刊（2012年1月～2014年11月『北日本新聞』連載）

『草花たちの静かな誓い』集英社 2016年刊（学芸通信社の配信により2014年3月～2016年8月の期間、順次掲載）





ことばのレストラン

～味覚からみる宮本輝の世界～

■ 料理が登場する作品の紹介

- 「三十光年の星たち」 作品紹介パネル、宮本輝氏一問一答パネル
- 「花の降る午後」 作品紹介パネル、映画『花の降る午後』ポスター
- 「骸骨ビルの庭」 作品紹介パネル、宮本輝氏一問一答パネル、グルメ特集パネル
- 「草花たちの静かな誓い」 作品紹介パネル
- 「にぎやかな天地」 作品紹介パネル

■ 登場する料理の紹介 メニューブックと単行本

MENU BOOK I ～世界各国の料理～

Menu of “アヴィニョン” *from* 「花の降る午後」 / *Menu of Soup from* 「草花たちの静かな誓い」

MENU BOOK II ～人びとの家庭料理～

Menu of “ツッキッコ” *from* 「三十光年の星たち」 / *Menu of* “みなと食堂” *from* 「骸骨ビルの庭」

MENU BOOK III ～時間と食品～

「にぎやかな天地」 日本の名店に生きる一品

展示ケース内

- <上段> ● 「にぎやかな天地」 読売新聞連載 坂上楠生氏挿絵原画
『発酵食品』（連載第240回）、『サンマ熟鮫』（連載第79回）
- 「にぎやかな天地」 出版販促物（読売新聞社）
- <中段> ● 「三十光年の星たち」 毎日新聞連載 赤井稚佳挿絵原画
『小路入口にある石の棒』
- 「三十光年の星たち」 出版販促物（毎日新聞社）
- 「草花たちの静かな誓い」 出版販促物（集英社）
- 舞台『骸骨ビルの庭』パンフレット 2011年 劇団文化座
- 映画『花の降る午後』パンフレット 1989年公開 東宝
- <下段> ● 「骸骨ビルの庭」 直筆原稿（複製）冒頭部分
- 「花の降る午後」 直筆原稿（複製）冒頭部分
- 「にぎやかな天地」 直筆原稿（複製）冒頭部分



- 「にぎやかな天地」 読売新聞連載 坂上楠生氏挿絵原画
『鮎鮫』（連載第143回）、『鯉 釜ゆで』（連載第258回）

■ レストラン風シンボル展示 料理に関する抜粋文パネル

- 「花の降る午後」 ● 「骸骨ビルの庭」 ● 「にぎやかな天地」 ● 「三十光年の星たち」
- 「草花たちの静かな誓い」